



第 64 号

目 次

論 文

- 時の法令—前漢月令攷— 馬場理恵子 (1)
- 北齊における盧舎那仏信仰の台頭 村松 賢子 (13)
- モンゴル国国書の周辺 植松 正 (27)

研究ノート

- 近代におけるカフェーの変遷 村田 瑞穂 (45)
- 明代海禁体制の再編と漳州月港の開港 木岡さやか (55)

書 評

- 母利美和著『幕末維新の個性6 井伊直弼』 箱石 大 (67)

載 録

- 植松正教授 略年譜・著作目録 (75)

-
- 彙 報 (85)

2 0 0 7 ・ 2

京 都 女 子 大 学 史 学 会

表紙の題字は故那波利貞先生の筆。『史窓』
が活版印刷になり第5・6合併号を発行した
とき（昭和29年）御書きいただいたものです。

二〇〇六年度 学会行事

新入生歓迎会

四月五日(木) 新入生オリエンテーション
本年度は新入生オリエンテーションと新入生歓迎バスツアーが同じ日に行われ、学会委員とっては大きな一日となりました。新入生にはあらかじめバスの号車ごとに席に着いてもらい、移動がしやすい状態になるよう学会委員が誘導しました。今年の新入生は全体の人数が例年に比べ少ないにもかかわらず、例年と変わらないくらい明るく、にぎやかな学生という印象を受けました。先生方の自己紹介、バスツアーの説明が始まると新入生の表情は真剣で、各々の大学生活にかける情熱がうかがえました。

その後の相談会はそれほど多くの時間は取れなかったのですが、時間の許す範囲で学会委員も新入生の不安や悩み、疑問を聞きました。その内容は例年と同じく、資格に関することやサークルと勉強の両立といった内容が主だったのですが、学会委員も同じ道を辿ってきた者として、親身になって対応しました。二回生の学会委員は初めて先輩としての立場を経験したことで、緊張しているようでしたが、上回生としての自らの意見を新入生に伝えるその姿はとても頼もしく思えました。新入生が抱く各自の理想に近づいていけるよう、学会委員始め、上回生が良い見本であり、支えになりたいと改めて思いました。

新入生歓迎バスツアー

宇治、平等院鳳凰堂へ

今年はおリエンテーションの後すぐ、バスで移動、西本願寺に参拝し、その足でバスツアー出発とハードなスケジュールになりました。参拝後バスに戻ってきた一回生に、バスの中で用意しておいた昼食をとってもらい、点呼をすませた後、バスツアー

に出発しました。バスの中では毎年恒例となった自己紹介が始まり、一回生は少し照れながらも歴史に対する意気込みなどを熱く語ってくれました。先生方もそれに負けないくらい熱く、少しユーモアを交えながら、自己紹介していただきました。車内がすっかり盛り上がったところで平等院に到着。少し残念なことに小雨が降る中の拝観でしたが、京都に来て間もない一回生は目を輝かせて見学していました。平等院を見学した一回生はその後の時間の許す限り、宇治周辺を散策しました。宇治川のほとりの桜が七分咲きで京都らしいしっとりとした風情を醸し出していたのが印象的でした。

学会委員は一回生の様子を所々写真に収めて回っており、一回生は最高の笑顔をこちらに向けてくれました。一回生たちはすっかりお互いに打ち解けたようで、企画した私たちもその楽しそうな雰囲気の仕事のやりがいを感じました。帰りは何事もなく予定通りに学校へ到着することができました。今回のバスツアーが成功することができましたのも、先生方や一回生の皆さんのご協力があったことであり、我々学会委員もそのことを常に忘れてはいけないなと思います。本当にありがとうございました。

夏季史学科学会旅行

九月十四日(木)～十五日(金)

道後温泉・大三島へ

今年はおアンケートの結果、春季の学会旅行が日帰りの旅となり、また時間がおしたりもしましたが、充実した内容の旅となりました。しかし、去年までの一泊での旅行を希望する声が多かったこともあって、今回、夏季に一泊での旅行が企画されました。参加者が先生方三名、四回生四名、三回生九名、二回生五名、一回生九名の合計三十名と多くの方のご協力をいただきました。初日は瀬戸内海の美しい景色を見ながら昼食をと

り、四国霊場八十八ヶ所第五十一番札所の石手寺を見学し、宿泊したホテルである古湧園へ到着しました。宿では先生方と学生たちが一緒になってカラオ

ケ等を楽しみ、普段では決して見ることのできない新たな一面を発見することができました。

翌日は村上水軍博物館と大山祇神社を見学しました。村上水軍博物館では鎧を着るという貴重な体験をした参加者もいました。大山祇神社には樹齢千年を超える大樹が何本もありました。宝物館では歴史上の有名人物の寄進した刀や長刀などを見学することができました。

学会旅行では普段はなかなか仲良くなるチャンスのない他学年、他専攻の人とも仲良くなることができます。また、行く場所も歴史的に有名な土地を中心に、個人の旅行ではなかなか行く機会がないような貴重な場所を見学することもできたりするので、まだ一度も参加したことがない方も、もう一度参加したいと思っている方も、この史学科ならではの旅行に参加してみたい方が多いでしょう。

春季公開講座

五月二十五日(木)

J四二〇教室にて

中世ヨーロッパの「関税」紛争

本学教授

山田 雅彦氏

卒業論文中間発表

日本史専攻

東洋史専攻

西洋史専攻

十月十八日(水)～二十日(金)

十月十一日(水)～十三日(金)

十月十八日(水)～二十日(金)

秋季公開講座

十一月十七日(金)

J四二〇教室にて

蒙古襲来の歴史的環境

本学教授

植松 正氏

中世寺院史への視角

本学教授

永村 眞氏

一回生専攻分け説明会

十一月三十日(木)

J四二〇教室にて
この日の昼休み、一回生が集められ先生方による

専攻分けの説明会が行われました。大学に入ってから早く慣れてきた頃に自身の選考を決めるということで、少し動揺している部分もあるようでしたが、自らの史学を学ぶ方向性が決まるとあって、その姿は真剣そのものでした。この一年間、歴史の基礎を積み重ねたことで、歴史に関する興味や考え方が変わった人が多いようで、初期に日本史を学びたいと考えていた一回生も東洋史、西洋史を学んだことでこっちに進もうと考えたり、またその逆も多かったようです。中には、この説明会の前から自身の専門としたところをすでに考えているという一回生もあり、自らの専門にしたいところが、どの専攻に属するかを話を聴きながら見極めていくようでした。質問の時間は今年も時間の都合上ほとんどとることができませんでしたが、一回生の皆さんには自身が残りの三年間で何を学び、何を研究していきたいかをもう一度良く考え、それぞれの専攻で学び、励んでいってもらいたいものです。

卒業生予餞会

十二月二十日(水)

四回生の卒業論文提出の日、毎年の恒例となっている予餞会が行われました。本年度は「かがり火」にご協力いただき、また、先生方や多くの四回生の方々にご出席いただき、とてもぎやかな会にすることができました。

常に我々の見本であった先輩方ですが、論文作成に向かう姿勢は特に印象的でした。論文提出までの期間はけっして平坦な道ではなく、時には行き詰ったり、予想外のことが起こったりしたことでしょう。あらゆる困難を乗り越え、この会場で明るく振舞っていらっしやる先輩方を見ると、とても輝かしく思えるのと同時に、自らの励みにもなりました。先輩方の功績はこれから社会に出た後も大きなプラスの力になると思います。先輩方のこれからのますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

早春の学会旅行

三月二十八日(水)～三月二十九日(木)
今頃は夏に続いて一泊二日での旅行を企画しています。和歌山県熊野を中心に熊野古道、熊野三山、補陀洛山寺、勝浦温泉などをめぐります。史学科ならではの恒例行事なので、大学時代の良い思い出作りぜひ一度参加してみたいかがでしよう。
(北野里奈)

二〇〇六年度 史学科講義題目

史学科共通

講義

- 史学研究入門 A
- 史学研究入門 B
- 日本史概論 A
- 日本史概論 B
- 東洋史概論 A
- 東洋史概論 B
- 西洋史概論 A
- 西洋史概論 B
- 考古学
- 民俗学
- 日本美術史
- 東洋美術史
- 西洋美術史
- 歴史地理学
- 人文地理学
- 自然地理学
- 地誌学

- 常松教授
- 谷口助教
- 瀧浪教授
- 坂口教授
- 松井教授
- 檀上教授
- 桑山助教
- 常松教授
- 梶川講師
- 根井講師
- 山本講師
- 竹浪講師
- 愛宕助教
- 南出講師
- 河原講師
- 相馬講師
- 金坂講師

史学基礎演習 B
松井・綾村・山田・坂口教授
授・桑山・谷口助教

日本史専攻

特講

近代日本の植民地移住体験を考える
坂口教授

安井三吉著『帝國日本と華僑―日本・台湾・朝鮮―』を読む
坂口教授

書跡資料の概論
綾村教授

書跡資料の伝来と内容
綾村教授

譜代大名井伊直弼の思想形成と政治行動
母利助教

古代女帝論
瀧浪教授

近世社会と学知
柴田教授

日本文化の歴史
山路講師

講義

日本史講義 I
柴田教授・母利助教・高井講師

日本史講義 II
瀧浪・綾村教授・吉住講師

日本古文書
綾村教授・母利助教・中山講師

演習

日本史演習 I
瀧浪・綾村・柴田・坂口教授・母利助教

日本史演習 II
瀧浪・綾村・柴田・坂口教授・母利助教

東洋史専攻

元代江南の政治と社会
植松教授

朝鮮古代史を考える
田中講師

古代東北アジア史を考える
田中講師

イスラーム時代西アジア政治史
谷口助教

イスラーム時代シリアの諸都市
谷口助教

中国中世史学 I―唐五代史史料を中心
木田講師

中国近世史学 I―宋代史史料を中心
木田講師

に―
木田講師

中国出土文字史料の検討
松井教授

に―
松井教授

史学基礎演習 A
常松・柴田・檀上・瀧浪・植松教授・母利助教

史学外書講義 I
谷口助教

史学外書講義 II
谷口助教

史学外書講義 III
坂口教授

漢文
植松教授・保科・井上講師

ラテン語
桑山助教

周代史の研究―文献史料と金文史料―
中国史上の諸問題
松井教授
富谷講師

講読

東洋史講読Ⅰ 植松教授・角谷講師
東洋史講読Ⅱ 富谷・岡本講師
東洋史講読Ⅲ 松井教授・井上講師

演習

東洋史演習Ⅰ 松井・植松・檀上教授・谷口助教
東洋史演習Ⅱ 松井・植松・檀上教授・谷口助教

西洋史専攻
19世紀アメリカの社会と経済―大衆消費主義の勝利―20世紀アメリカ社会―
常松教授

特講

元首政期ローマ帝国とギリシア世界 桑山助教
元首政期ローマ帝国の東方辺境 桑山助教
ヨーロッパ中世都市史の諸問題Ⅰ―都市の形成・発展とその世界的地位― 山田教授
ヨーロッパ中世都市史の諸問題Ⅱ―共同体もしくはその社会的結合― 山田教授
近代イギリス社会と女性 河村講師
イギリスにおける女性参政権運動の研究 河村講師

ポーニアと白鷲―ポーランド国家と民族の表象の歴史から― 小山講師
バルカン地域の東西文化交流 中村講師
中央アジア、ユーラシア東北部の東西文化交流 中村講師

講読

西洋史講読Ⅰ 常松・山田教授
西洋史講読Ⅱ 青木講師
西洋史講読Ⅲ 山田教授・轟木講師

演習

西洋史演習Ⅰ 常松・山田教授・桑山助教
西洋史演習Ⅱ 常松・山田教授・桑山助教

〔注〕Aは前期、Bは後期、特記していないものは前後期共通。ただし特講(特殊)については、同一担当者が前後期それぞれ別の題目を掲げている場合は、前期・後期の順に掲載し、科目名とA・Bの記号は省略した。

二〇〇六年度 卒業論文題目

日本史専攻

天野絵理子 特攻隊の誕生―強制の有無を考える―
石井 沙織 華族の終焉
磯谷 寛子 潜伏キリシタンの信仰生活―『ごんちりさんのりやく』から考察する祈りの生活―

市川 知加 修身教科書に見る『理想の女性像』―十五年戦争期を中心に―
伊藤明日香 首獲物の古浄瑠璃
伊藤 佑香 太平洋戦争後のハワイの神社―ハワイ出雲神社を事例として―

稲治 美絵 中井竹山の社会論と寛政期の貯蓄政策
猪野 恵利 竹田座におけるからくり芝居の変化
岩淵 暁子 日露海戦史―秋山真之と丁字戦法―
上田ゆかり 後白河院の文学観と宗教観
内山 智恵 郡司制の特質について―八世紀郡領任用政策を中心に―

梅垣 会理 天明の印旛沼普請―その目的の移ろいと地元の実状―
尾崎 由佳 文化十年廻米制限令における大坂市場への影響
片桐 優起 大村益次郎訳戦術書『活版兵家須知戦闘術門』―長州藩軍事改革への影響―

上口 知子 桓武期における渡来系の外戚
蒲原 真実 茶会記に見られる菓子
川田 花栄 室町時代の女房―民部卿局を中心に―

上林 莉沙 北条政子―鎌倉幕府において果たした役割―

木南瑛美子 江戸の芝居見物―大衆席からみた棧敷―

木村 美春 紀行文にみる伊豆―下田往還を中心―

黒田 早織 平安時代における貴族の婚姻
黒田ゆきえ 近世後期における草花の流行と鉢植え園芸の普及

黒田 玲子 平安貴族の生活と病氣
桑原菜保美 桓武天皇と長岡京
小池 里実 鎌倉・南北朝期における喫茶の伝播

坂口 友子 『すがも新聞』―B C級戦犯たちの訴え―
坂本 真悠 源平の乱と熊野別当堀増
佐々木瑞穂 京の花街―鳥原と祇園の盛衰―

佐野 優子 安政期における福井藩の藩校設立とその教育
清水 淑子 明治初期における警察成立史―川路利良の『警察手眼』にみるモデル選取―

尻池 由佳 宇治都市形成の一考察―院政期撰関家別業を中心に―
高橋 千穂 人間魚雷「回天」―語り継ぐために―

嶽岡 華子 額田王と鏡女王―原点到帰して考える―
竹腰 早希 御土居の保全と利用―東塩小路村の事例から―

竹本 咲希 古代の狐観から探るその源流
田中麻里衣 田邊太一の外交観―二度の遣欧使節を通して―

谷垣 有香 賀茂から慶應への改姓について
塚本 智子 近衛府の一考察
土田 郁 古代の老人観の変遷について

出口ハルノ 中世交通発達における熊野先達の機能について
富田奈緒美 大久保利通からみる征韓論政変

中川 温子 中世後期の村落について―和泉国熊取

中島 愛 再興大名と初期江戸幕府―関ヶ原合戦の西国大名処分―

中島みゆき 細川三斎の茶の湯観

永井 聖子 小林二三の演劇観―草創期の宝塚を中心として―

永田かがり 藤原四子体制の再検討―四子の内部分裂をめぐって―

長柄 理恵 時事新報社説に見る朝鮮問題―元山事伴・壬午軍乱―

鍋田 桂子 三河弁と江戸語

生川 祐子 秀吉の政治と茶の湯

西川 真由 日本における狛犬の誕生

西橋 環 長島一揆についての一考察

西村 由記 職名保持から見た寛平の遣唐使計画

橋本 安菜 綱吉政権期における人心教化策

速水亜希子 七福神信仰の実態

平岡 育子 平安遷都千百年紀年祭への市民の参加―日出新聞にみる―

弘中 郁恵 萩藩毛利家の婚姻―正室と側室を中心に―

藤枝 広子 尾張藩の天明改革―細井平洲の登用をめぐって―

藤田真理子 明治初期における鉄道政策―国有論と私有論―

水上加奈子 日本人の捕虜観―形成と影響を考え―

緑川ちひろ 相撲興業―その背景にあったもの―

森下 絵梨 「大塩建議書」再考―腐敗政治告発から探る大塩の真意―

山口 裕美 南部仏印進駐の決定過程―陸軍内での北進論と南進論―

山崎 南 中世京都の散所―東寺散所を中心に―

山田 千晶 古代の皇后

山根 知子 高杉晋作―書簡を通して探る実像―

渡邊 貴代 敲石研究の新視点―石器製作敲石の認定基準について―

中村 友子 信長公記について

小西 恵 江戸時代と現代の盆行事―江戸と現代の比較を中心に―

東洋史専攻

青井 咲 蔡元培と中国近代教育

赤石麻由子 デイーネ・エラーヒーの創始―アクバル大帝と諸宗教―

赤江 珠実 鴉片戦争前における沿海民の密貿易活動と清朝の対応

石田 裕子 則天武后論―その資質と人間関係―

泉谷 裕子 オスマン帝国のデヴシルメに対する考察

稲田 美紗 日本政府の軍慰安婦政策に関する責任の所在

井上智恵子 明末江南の出版文化と読者層

内橋 智子 日清戦争と台湾割譲問題―台湾民主国成立前の日・中・台の交渉―

内海 陽子 元朝世祖期の規則からみた站赤

大塚 瑠璃 蕭友梅と近代中国音楽

奥宮 加奈 司馬遷の『史記』著述の背景―李陵の禍を中心に―

瀨良 依子 北魏道武帝の部族解散

高木 雅代 日本領台期における高砂族の教育

谷口 美佳 清末民初纏足反対運動の現代的意味

徳山 幸恵 初期アッパース朝時代の商人たち―シラーフ商人の活躍―

戸田 萌子 ベトナム陳朝の支配体制

中島 ゆき 朝鮮後期における三軍と王族

波部 綾香 春秋時代の晋の三軍と世族

早川麻貴子 パルミラの社会と死生観―東南墓地C号墓・F号墓の事例を中心に―

廣瀬 祐佳 徽宗皇帝の文化事業と蔡京の一族

福重 麻木 五、六世紀の柴山江流域

藤井さやか 清朝の中国支配と「華夷一家」の世界観―『大義覚迷録』を通して―

藤谷 さよ 前漢代における商人と市籍

丸島 千明 プレヴェヱザの海戦

三宅さやか 中国古代の市場と処刑

森 有希 アフドナーメの変容から見るオスマン・ヴェネツィア関係

西洋史専攻

東 鈴子 ユーゴ紛争と国際社会―ボスニアへルツェゴビナ内戦を中心に―

磯貝 碧里 古代エジプト人の来世観

宇津美由紀 ローマ帝政初期のユダヤ属州

北澤 彩 和的国際機構―
一九世紀末から第一次世界大戦期にい
たる政軍関係

越野 綾 古代エジプトの神王理念とピラミッド
カトリック両王時代のスペイン

是永 真紀 ルネサンス期の女性
ロマンティックパレエはなぜ衰退した
のか―パリオペラ座と一九世紀のフ
ランス社会にみる―

澤田 結 中世パリ大学―学生たちの人生―
「沈黙の掟」―シチリア・マフィア
考―

四方 泉 ナショナル・トラスト設立と一九世紀
の社会情勢

嶋田 真弓 民衆の信仰とキリスト教―二・一三
世紀を中心に―

清水 裕子 エジプトとエチオピアからみる独立
中・近世バルト海貿易におけるハンザ
とオランダ

白井齋緒里 ヌダヤの雌フタ
アイルランド土着の文化とキリスト教

鈴木 愛子 キューバ「自由化」政策―グローバル
化における社会主義体制の展望―
オーストリア「ハンガリー二重帝国と
民族問題

高橋 佳代 帝政ローマの始まりとアウグストゥス
崇拜

田口 裕野 一八世紀のイギリス議会政治とウォル
ポール内閣

寺川 奈々 セレウコス朝とユダヤ人
西洋中世の同職組合と都市当局―ニユ
ルンベルクの製パン手工業者を中心
に―

中川 梨絵 インディアス政策とラス・カサス
一九世紀ロシアのナロードニキの形成

中田 早紀 アメンホテプ四世とアマルナ革命
近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

生川 久乃 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

西岡友里子 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

橋本 洋子 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

林 桃子 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

福田みのり 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

藤川 美穂 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

藤本 京子 近代イギリスにおける茶文化の形成
―茶論の展開を鏡にして―

藤原まり絵 古代メソポタミアの神々と死生観
湖上 裕子 ホロコースト前夜

増田 友紀 中世宗教劇の発生と終焉
松本 英子 冷戦のはじまりと核兵器管理

見澤 知美 中世から近世における貧民救済の移行
―イングランドを中心に―

道脇 眸 一九世紀におけるナポレオン像の変遷
武藤麻里子 ギリシア人におけるアテナイ祭儀
と悲劇を通じて―

望月真里子 ソ連の対日参戦と対欧外交
横山 恭子 首都ローマにおける皇帝アウグストゥ
ス建築活動

渡邊 優子 戦争法と捕虜

二〇〇六年度 大学院文学研究科

史学専攻博士前期(修士) 課程講義題目

特論

古代都市形成論
平安京の研究

書跡資料の概論
書跡資料の整理と伝来の研究

幕末期会津藩の政治動向
近代東アジア地域における人の移動

「清和院町日誌」を読む
近世のバスポート体制

※日本文化の歴史を考える
日本古文書学特論

中国古代中世史特論
元代沿海地域社会の諸問題

明代沿海地域社会の諸問題
中国社会史特論

※中国史上の諸問題
※中国中世史学史―唐五代史史料を中心
に―

※中国近世史学史―宋代史料を中心
に―

前近代アラブ地域のウラマー
イスラーム文化における口承の尊重

谷口助教
谷口助教
谷口助教

※バルカン地域の東西文化交流
※中央アジア、ユーラシア東北部の東西
文化交流

元首政期ローマ帝国の領域形成
後2世紀ローマ帝国と周辺世界

ヨーロッパ中世の権力と経済
※イギリス女性参政権運動史研究の再考

※欧米近現代女性史研究の再考―「ジェ
ンダー」の視角から―

アメリカ現代政治史
アメリカ大衆社会論

※ポロニアと白鷺―ポーランド国家と
民族の表象の歴史から―

小山講師
常松教授

日本史特殊研究 V
 東洋史特殊研究 I
 東洋史特殊研究 II
 東洋史特殊研究 III
 東洋史特殊研究 IV
 西洋史特殊研究 I
 西洋史特殊研究 II
 西洋史特殊研究 III

柴田教授
 松井教授
 植松教授
 檀上教授
 谷口助教授
 桑山助教授
 山田教授
 常松教授

二〇〇六年度 大学院修士論文題目

井関 裕子 戦国期雜賀衆研究の再検討
 小森 麻澄 年中行事の成立
 妹尾明日香 平安時代における乳母の研究
 中山 静香 橘氏の研究―葛城王の賜姓を中心に―
 中西 梨恵 『続高僧伝』に見る唐初の仏教界
 沼尾 茜 イエズス会の中国布教と明末南京教案
 今井 彩 グアラニ・ミッシュンにおけるイエズス会士の原住民教化
 大幡 莉沙 プラトンと政治―教育活動の理想と現実―
 玉城 湖澄 アイランドにおけるジャガイモ飢饉と救済政策

二〇〇六年度 大学院行事

研究発表会・その他

四月 二十六日 修士研究発表会
 八世紀の外交政策―新羅から渤海への転換―
 M1 岡田 知春
 平安貴族を通してみる鬼の姿―出現場所にみる―
 M1 福寿 雅子
 徐皇后『内訓』と永楽帝―その公刊の意義と女性像―
 M1 前田 尚美
 アメリカのユダヤ人
 M1 原戸 僚子

四月 二十六日
六月 二十三日

大学院歓送迎会(天竺にて)
 史学研究会春期例会
 乾隆初年における清朝の雲南経営について―金沙江開鑿工事を中心に―
 D3 森永 恭代
 スコットランド宗教改革議会議決の過程
 D1 小谷美記子

七月 十二日

修士論文準備報告会
 唐初における社会と仏教
 M2 中西 梨恵
 明末南京教案と中国天主教
 M2 沼尾 茜
 イエズス会による先住民教化
 M2 今井 彩
 プラトンとプラトンが生きたギリシア世界
 M2 大幡 莉沙
 アイランド・ジャガイモ飢饉と救済政策
 M2 玉城 湖澄

七月 十三日

中近世移行期における雑賀衆―兵農分離政策を中心として―
 M2 井関 裕子
 平安時代の儀式―年中行事の成立―
 M2 小森 麻澄
 平安時代の乳母
 M2 妹尾明日香
 橘氏の研究
 M2 中山 静香
 修士論文中間発表会
 紀州藩における兵農分離―中近世移行期を中心に―
 M2 井関 裕子
 平安時代の乳母―変遷の画期―
 M2 妹尾明日香
 橘氏の研究―葛城王の賜姓―
 M2 中山 静香

十一月 十四日

十一月 十五日

プラトンの理想国家と古代ギリシア
 M2 大幡 莉沙
 バラグアイにおけるイエズス会士の原住民教化
 M2 今井 彩
 アイランドにおけるジャガイモ飢饉と救済政策
 M2 玉城 湖澄
 唐初における仏教の一考察―「供養」の変遷―
 M2 中西 梨恵
 イエズス会の中国布教と明末南京教案
 M2 沼尾 茜
 懇親会(靖馬にて)
 史学研究会秋期例会
 近世庶民と暦―「古谷道庵日乗記」を素材に―
 D3 川崎 理恵

十一月 十六日

十一月 十六日
十一月 一日

領域別行事

東洋史
七月 二十二日

合評会
 檀上寛 『元明時代の海禁と沿海地域社会に関する総合的研究』―平成十五年度「平成十七年度科学研究費補助金(基盤研究(C))」研究成果報告書― 研修者 木岡さやか
 森永恭代 「乾隆初年の雲南金沙江開鑿工事について―清代雲南における航路開発の一事例として―」
 『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』史学編第五号
 M1 前田 尚美

研究室だより

二〇〇六年度の史学科は、新たに綾村宏教授、山

田雅彦教授、桑山由文助教をお迎えしました。綾村先生は、寺院史を中心に日本中世史を、山田先生は、経済史・都市史を中心に西洋中世史を、桑山先生は元首政期のローマ帝国をそれぞれ専攻されています。お三方は順番に六〇歳初頭、四〇歳代後半、三〇歳代半ばですから、史学科教員の平均年齢がずいぶん若返りました(その分、以前からの教員の年齢は、絶対的には当然のこととして、相対的にも高くなりました)。

なお、宋・元代を中心に東洋史を担当されてきた植松正教授が、この三月末で退職になります。講義や学生指導にあたってこられただけでなく、ご着任から十三年間に、学科主任を三年、文学部長を三年勤められました。とくに学科主任時代には、大学院改組に取り組まれ、大変な苦勞をなさいました。心から感謝を申しあげると同時に、今後のますますのご発展を祈念する次第です。

今年度の史学科は、いつもの年と同じように、新入生歓迎バス旅行、春秋の公開講座、史学会旅行といったスケジュールをこなしてきました。ただし、今年度は久々に春季以外の学会旅行が復活しました。詳細な情報は、写真とともにこの彙報欄に収録されていますので、ご参照ください。

卒業論文の提出者は一四八人でしたが、これは提出予定者全員の数です。五回生以上の学生諸君も含め、全員が卒業論文を書きあげることができました。しかもほぼ全員、前例のないほど、締切り時刻にかなり先んじて提出しました。いつもは、教養課の窓口付近で提出時刻を過ぎて清書に勤しむ学生が何人かいますから、教員全員驚くと同時に、内容は大丈夫だろうかと多少不安も覚えたほどです。それはともかく、まずはおめでとくと誌上を借りて祝福しておきます。本誌が出版される頃には、卒業論文の試問も終わっているはずですが、どうかそれも無事に突破できていますように。

昨年一月には、一回生の専攻分けが行われ、日本史七五名、東洋史二五名、西洋史三五名という内訳になりました。日本史希望者が多いのは例年と同

様ですが、西洋史が学生数において二位の座を奪還しました。去年の『史窓』編集後記にも記したように、学生数の多さを競うというのは、あまり意味があることではありませんが、西洋史担当者としては、志望学生が一定程度確保できたことを喜んでおります。専攻の如何にかかわらず、来年度からいよいよ専門課程を歩み始める一年生諸君には、存分に研究に励んでほしいと切望します。

(史学科主任・常松洋)

学会委員

二〇〇六年度の学会運営に協力して下さった学会委員は、次の方々でした。例年通り、史学会諸行事の企画から運営まで、全般に渡って支えていただきました。篤くお礼申し上げます。

委員長	東洋史三回生	久門 和子
副委員長	日本史三回生	村上 沙織
書記	西洋史三回生	北野 里奈
書計	日本史三回生	岡 真由子
広報	日本史三回生	寺内 裕香
	東洋史二回生	佐藤 友里
	西洋史二回生	田中小百合
	東洋史二回生	平田悠里子
	日本史二回生	山根亜優美
	東洋史二回生	吉田 智子
	一回生	石田 智美
	一回生	小堀 晴菜
	一回生	庄司 育子
	一回生	中村 綾子
	一回生	古谷 育世
	一回生	松本 泰香

京都女子大学史学会会則

(二〇〇三年三月二〇日制定)

(名称)

第一条 本会は、京都女子大学史学会と称する。

(事務局)

第二条 本会の事務局は、京都女子大学文学部史学研究室に置く。

(目的)

第三条 本会は、史学に関する諸問題を研究し、もって学界に寄与することを目的とする。

(会員)

第四条 本会は、京都女子大学文学部史学科の専任教員および本会が特に認めた者をもって組織する。

(事業)

第五条 本会は、第三条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- 1 機関誌『史窓』の発行。
- 2 講演会、研究発表会。
- 3 その他必要な事業。

(代表)

第六条 本会に代表を一名置く。代表は会員の中から互選し、任期は一年間とする。ただし、再任を妨げない。

(委員会)

第七条 『史窓』の発行のために、『史窓』編集委員会を置く。委員は会員の中から互選し、任期は一年間とする。ただし、再任を妨げない。その構成員は以下のとおりとする。

- 1 編集委員長 一名
- 2 編集委員 若干名

(総会)

第八条 本会の総会は、一年に一回以上開催し、本会の重要事項を議決する。

(事業費)
第九条 本会の事業費は、京都女子大学学会・機関誌刊行経費、その他をもってこれに当てる。

(会則の改廃)

第十条 この会則の改廃は、総会の議決を経て実施する。

附則 この会則は、二〇〇三年四月一日より施行する。

『史窓』に関する規約

(二〇〇三年三月二〇日制定)

第一条 京都女子大学史学会(以下「本会」という)は、機関誌として『史窓』(以下「本誌」という)を刊行する。

第二条 本誌への投稿資格者は、本会会員および『史窓』編集委員会が特に認めた者とする。

第三条 原稿は、未発表のものに限る。

第四条 本誌に掲載された作品の著作権は、本会に属する。

第五条 執筆要項などの細則は、別に定める。

第六条 この規約の改廃は、編集委員会の議決を経て、総会の承認を得て実施する。

附則 この規約は、二〇〇三年四月一日より施行する。

編集後記

『史窓』第六四号をお届けします。例年に比して若い方々による著作が多数を占める号になりました。その中でただひとり本学教員として寄稿していただいた植松教授は、本年度末をもって定年により退職されます。本号には植松教授の略年譜と著作目録を掲載いたしました。

若手の執筆者では、植松教授に直接指導を受けた村松賢子さんに加え、本学学部および大学院で東洋史を学んだ馬場、木岡の両氏が原稿を寄せてくださいました。これは編集委員会から特に執筆をお願いしたわけではなく、執筆者からの自発的な申し出によるものであることを書き添えておきます。

上記の他、昨年度末に本学大学院博士前期課程を修了した村田瑞穂さんの研究ノートと母利助教授が先般上梓された著書の書評を掲載いたしました。今号も、執筆者の方々と本学各部署の協力を得て発行することができました。関係者各位にお礼申し上げます。

なお、常松委員の退任に伴い、今年度より西洋史コースからは桑山助教授に編集委員会に加わってもらうことになりました。(谷口淳一)

執筆者紹介

馬場理恵子 本学大学院特別研修者

村松 賢子 武蔵野大学大学院博士課程

植松 正 本学教授

村田 瑞穂 本学大学院研修者

木岡さやか 本学大学院研修者

箱石 大 東京大学史料編纂所助教

(掲載順)

編集委員

谷口 淳一 (委員長)

母利 美和

桑山 由文

史窓 第64号

二〇〇七年二月三日 印刷
二〇〇七年二月十日 発行

編集 『史窓』編集委員会

発行 京都女子大学史学会

京都市東山区今熊野北日吉町三五
京都女子大学文学部史学研究室内
〒(〇七五)五三一―九一一
代表者 常松 洋

印刷 株式会社 印刷同 朋 舎

京都市下京区中堂寺鍵田町二
〒(〇七五)三六一―九一二

※掲載内容の著作権は、京都女子大学史学会に帰属
します。

KYOTO WOMEN'S UNIVERSITY

Journal of Historical Studies

SHISŌ

Vol. 64

February 2007

Contents

Articles

- BABA Rieko, The Statute of "Time" : A Study of Yueling 月令 in the
Western Han Dynasty (1)
- MURAMATSU Takako, The Vairocana Sect of Buddhism in the Northern
Qi Dynasty (13)
- UEMATSU Tadashi, Some Notes on the Correspondence from the Mongol
Empire to Japanese Authorities (27)

Research Notes

- MURATA Mizuho, "Cafe" Culture in Modern Japan (45)
- KIOKA Sayaka, The Opening of Yue Gang Port 月港 in Zhang Zhou :
A Changing of Exclusion Policy of the Ming Dynasty (55)

Book Review

- MORI Yoshikazu, *Ii Naosuke (Political Personalities of Japan in the Later
19th Century, vol. 6)* (HAKOISHI Hiroshi) (67)

Biographical Note and List of Works

- UEMATSU Tadashi (75)

- Miscellaneous (85)

THE ASSOCIATION OF HISTORICAL STUDIES

Kyoto Women's University, Kyoto, Japan

ISSN 0386-8931